

「新井家」のルーツ探索

新井 宏

一 はじめに

二十年ほど前、韓国国立慶尚大学に滞在していた頃、ときどき「新井先生はトンボ（同胞）ですか」と尋ねられた。意味は「在日韓国人ですか」ということである。

それは、「創氏改名」が法制化される昭和十五年（1940）以前から、大阪等の在日韓国人の間で、通称を日本風にする者が多く、その中でも韓国で二番目に多い「密陽朴氏」のほとんど全てが「新井」姓を名乗っていたからである。

尋ねられた時のニュアンスは、「親しみをこめて」が半分、「何だ！在日か」が半分であり、適当に「どうも違うようです」と答えて置いた。

父母の出身地が新潟県であり、相続の時に取り寄せた「戸籍謄本」をみると明治中頃には既に「新井」姓とあるので間違っただけではなかったであろう。

ほとんどの「朴」氏が「新井」姓を名乗ったのは、初代の新羅王・朴赫居世から三十三世孫の密陽大君・朴彦忱を本貫とする密陽朴氏が、「祖の新羅王が井戸のほとり」で生まれたとの伝承に由来するという。

韓国に関するクイズに「一般家庭で最も大切にされているものは何か」と言うのがある。答えは「族譜」で火災の時に真っ先に持ち出す「家宝」だという。日本で言う系図のようなもので、歴代祖先の経歴等も記載され、百科事典ほどの厚さがあり、五百宗族、千種類ほどが出版されている。なにしろ、国民のほとんどが「両班」になりたかった国であり、同姓婚を禁止する根強い規制もあり、恋愛をするにもまず相手の本貫や姓を確認しなければならぬ国だから「同族」の意識は極めて強い。

その頃、私も「戸籍謄本」を見ながらルーツ探索を思い立ったが、すぐに諦めた。曾祖父までは判ったが、商

売をやっていた祖父の死後、その長男(伯父)一家が「事情があつて岡崎」に移住してしまい、曹洞宗の菩提寺も判らなかつたからである。いづれにしても農村のこととして調べても結果は知れたものと判断していた。

ところが史遊会の関係で、長岡市出身の諸橋奏氏が、栃尾の大庄屋川上家の後裔であることから、川上家に連なる資料集を編纂した時にお手伝いをして感得するものがあった。新井家も長岡市郊外の出身だからであるが、明治五年創立の長岡高等学校の教員名簿の二番目、教頭に次いで新井二郎(数学、長岡藩)の名を見つけたからである。長岡藩士を辿って新井家の祖先の情報を調べることは出来ないだろうか。

しかしコロナ禍が始まり、国会図書館の利用が不便になりまた諦めていた。

そして、『まんじ』前々号(一六二号)に「藤村と藤井宣正」のことを書いていて、思いがけない発見が幾つも続いた。ほとんど何も情報のないところに、仮説をつくり資料をさがす楽しさである。

新井家は明治時代、現在の新潟県長岡市片田町の中心十字路の一角で『新橋屋六兵衛』という屋号の「糸繰る所」を営んでいた。糸繰りとは「製糸」のことで、長岡は生糸産業の盛んなところであった。

二 戸籍謄本からの遡及

手がかりは何と言っても、相続の時に取り寄せた父・新井稔の出生時の戸籍、すなわち祖父・新井孫七が戸主となつた明治八年(1875)から死亡した大正二年(1913)までの「明治十九年式」除籍謄本である。一字一句丁寧に読んで、家系図に纏めて見たのが表1である。

この戸籍簿では、江戸末期生まれの高祖父・孫六にも、曾祖父・六歳にも新井という姓が付いていることから、新井家が士族だったかも知れないと思つた。しかしそれは早とちりだったようだ。

祖父・孫七が戸主となり新たな戸籍を開いたのが明治八年十二月、その直前の同年二月には既に「平民苗字必称義務令」が公布されていて、孫七が姓を持つのは当然であり、遡及して故人となつていた孫六、六歳にも姓を記入した可能性があるからである。

そのことを確認するため、六歳を戸主とする戸籍を長岡市役所に請求したが存在しないとの回答であつた。考えてみれば、明治八年に死亡した戸主・六歳の戸籍は、あつたとしてもいわゆる明治四年式の「壬申戸籍」であり現在は閲覧不可とされている。

ところで庶民に苗字がなかつたというのは誤りだという。享和元年(1801)の「苗字帯刀禁止令」が出される

片田村清水儀左衛門長女

戸主 新井孫六 1823.11.3生 1887.10.8没

長女 新井六蔵 1875.12.25没

戸主 新井孫七 1867.1.22生 1913.10.19没

結婚 1890.12.15

トセ 1868.7.18生 1840.2.12没 三島郡高森村

トセ 1890.12.15

長男 新井七平 1898.4.13生 戸主 1913.10.19

長男 新井長平 1901.4.29生 新井良作・新井盛二・新井重夫 新井正治・伴和子

二男 雲平 1904.1.11生 夭逝 1905.1.5没

五女 ハク 1906.3.7生 夭逝 1907.10.9没

三男 稔 2009.6.14生 新井宏・北折美枝子・小泉玲子 新井繁

六女 スズギ 2011.8.23生 本間好江・広川儀一郎・広川義昭

長女 イキ 1890.3.20生 関矢勇吉・泰須野ギヨ・田井ギタ 関矢文治郎 赤塚トキ

二女 オサ 1893.11.17生 田井松次

三女 トメ 1895.12.30生 三浦治雄

四女 七平 1898.4.13生 夭逝?

戸主 龜壽 1904.5.24生 群馬県館林d市(大島264)へ養子(1908年)

荒井よつ

場合、公の場での使用が禁止されただけで、大部分は姓を持ち続けていたのだと言う。

かくして戸籍簿からのルーツ遡及はまた一頓挫してしまった。

しかし、六歳の二男・新井鶴松の子、亀壽が四歳の頃、群馬県館林市の大島二六番地に養子に出されたいことが判ったのは収穫であった。ただ、戸籍簿の記載欄の約半分が白紙で塗抹されていて、あるはずの養子先等が判らない。

その点では亀壽の母、すなわち六歳の二男・新井鶴松の妻の名が「荒井よつ」となっているのがヒントになった。館林市とくに大島地区は隣接する邑楽郡板倉町とともに日本全国で最も「荒井」姓の多い地域だからである。関連地域の「荒井」姓の分布統計を簡単に示す。

日本全国平均	123,000 / 126,500,000 = 0.10%
群馬県邑楽郡板倉町	350 / 14,300 = 2.4%
群馬県館林市大島町	50 / 6,200 = 2.2%
群馬県館林市	700 / 75,400 = 0.9%
新潟県長岡市	70 / 275,000 = 0.03%

この結果から見て、亀壽の養子先は母・よつの縁者と見て間違いないであろう。

製糸業の盛んな群馬県にあって、館林市はひとつの中

心地であった。この地発祥の美智子上皇后の生家正田家「日清製粉」とならんで、館林の近代化に大きく寄与した「上毛モスリン」という織物会社（最盛期資本金四百万円）があった。上毛モスリンの前身、明治三十五年（1902）設立の「荒井織物工場」の創始者は荒井藤七と言ひ、大正二年（1908）には旧藩主秋元家から「一の丸」の跡地四千六百坪を買い取り、館林工場を稼働させている。その他にも俳人として名を残した荒井閑窓は綿糸間屋「カネ正荒清」の当主で五十万円の資産家であった。

このように、館林市には荒井姓が非常に多いばかりでなく、製糸業においても有力者がいた。

新井家は片田村で『新橋屋六兵衛』という屋号の製糸商を営んでいた。製糸業の盛んな館林の業者とも取引があり、新井鶴松の妻・荒井よつ、すなわち亀壽の母は館林の製糸業者から嫁入りして来たと考えても外的外れでは無からう。俳人荒井閑窓は館林市の善導寺で漢学を学んだというが、亀壽の入籍した地、大島村二六番地（現在の表示ではなく明治期の土地台帖の表記で今も土地取引に使用されている）は善導寺までわずかに四百メートルの距離である。「一の丸」跡地にしても一・五キロメートルの距離である。

なお、私の祖父母・孫七とトセは、男三名、女六名の子供に恵まれたが内三子が夭逝している。父は第八子ながら実質次男であり未っ子であった。伯父の長平は長男

と言っても、長女・イキと十一歳も歳が離れていた。

三 片田村の歴史から

戸籍からの遡及は予感通り挫折してしまったので、方向を変えて、地域の歴史を調べてみた。その中で、明治十一年(1878)の『越後国各郡村誌』の存在を知った。県下の村々が新潟県令に報告したものであるが、新潟県庁の火災でほとんどを焼失してしまった中、わずかに数十村の村誌が残っていた。その中に、古志郡の高山村、高山外新田、片田村、小嶋古新田、犬茂嶋村、向嶋新田の六か村の村誌が「奇跡的」に含まれていたのである。有りたいことに全文が『岡南の郷土誌』に三十四頁にわたり掲載されている。その中に各村の平民、士族の人数が記載されていた。表2に示す。

それによると片田村の士族が五戸三十四人(七%)と異常に多いのである。もつとも高山村と片田村を除けば小村の事として士族がいなくとも当然であるが、隣村十日町村の状況がわからないので片田村だけ異常に多いとは言いが切れない。ただし、新潟県(越後)の士族の比率は平均二・三%で、農村部の比率は当然その値よりかなり低いはずである。

高山村には、信濃川の用水路「福島江」の開鑿に大功のあった庄屋・穂薙茂左衛門の子孫が在村していた。小千谷市で取水し長岡市を経て見附市に至る約二十キロ

表2 片田村、高山村関連の士族、平民数

古志郡	士族		平民		寺社	
	戸	人	戸	人	戸	人
高山村			111	653	1	3
高山村外新田			1	9		
片田村	5	34	88	459		
古新田			2	11	1	
犬茂嶋村			11	55	2	
向嶋新田			26	142	2	
合計	5	34	239	1995	6	3

メートルの「福島江」は、慶安四年(1657)に完成するが、表高七万四千石の長岡藩が実高十四万石となったのは、ひとえにそのお陰であり、穂薙家は代々苗字帯刀が許されていた。それなのに士族がゼロというのは何か事情があったのであろうか。

さて、新井家があつた片田村には、終戦翌年の小学校三年生から五年生までの三年間疎開していた。いや正確に言えば、父の長姉・関矢イキの家に寄寓していた。

関矢家は正大正二年(1913)、前戸主・新井孫七の死亡に伴い新戸主となった伯父・新井長平が昭和初期になって岡崎に移住してしまい空地になっていた隣地にあつた。平屋と見間違うほど背丈の低い家屋で、道路に面した一階は「のしや」という雑貨屋、二階は六畳間を縦に繋いだ洒落た客間で、我々母子四人(末弟はまだ生まれていなかった)はその二階の奥の納屋を改造して住んでいた。父は復員してきても勤め先

だった国策会社・南興水産^①が無くなってしまっていたので、幼少時に修行した大工に戻り、東京に出稼ぎに行っていた。

後に知ったが、その家屋は文久年間(1861〜64)に造られたものだという。状況から判断して、新井家の長女・イキが結婚するに当たって本家の家屋の一部を貰い受けたのであろう。二階の客間はちよつと改まった村の集会に利用されていた。

ついでながら、父の成人した姉妹四人は誰も農家に嫁入りしていない。それが『新橋屋六兵衛』の家風であったのであろうか。

さて、三年間の疎開生活を送った片田村には多少の土地勘がある。石垣で囲まれたお屋敷は折からの農地解放で没落した庄屋層であり、その他には武家屋敷のような家屋は見当たらなかった。旧家といわれるのは里見家で伝承では新田義貞に仕えた里見大膳亮の末裔だという。明治の中程、片田村が十日町村に併合された際に里見家から村長を出しているの、士族であったかも知れない。

その他に、片田村は古志郡五十か村の中で、最も早く明治五年(1872)に「黌」すなわち小学校を設置したことで知られている。人口五百人の片田村で、教員五名、男生徒一六五名、女生徒十一名の陣容だったというが、形式的には近隣二十六か村組合の学校であった。教師の多くが旧長岡藩士というから、もし片田村に定住したと

すれば士族として数えられたであろうが、当時の本籍地に対する意識から見ても、その可能性は低いと思う。

糸繰る所『新橋屋六兵衛』が始まったのは文久年間(1861〜63)の可能性が高く、北陸戊辰戦争で敗れた長岡藩士の「にわか武家の商法」という訳でもなさそうだ。ここまでの議論を経て、もう諦めてもよいのに、まだ新井家が士族であった可能性を探ろうとしているのは「新井」姓の特異な分布による。館林市で成果を得た「荒井」姓の調査を応用した「新井」姓の結果は現代の統計では次の通りである。

日本全国平均	203,000 / 126,500,000 = 0.16%
埼玉県	74,200 / 2,339,000 = 3.2%
群馬県	25,000 / 1,933,000 = 1.3%
新潟県	960 / 2,202,000 = 0.04%
新潟県長岡市	90 / 275,000 = 0.03%
古志郡(片田・村松・濁沢)	30 / 1,200 = 2.5%
古志郡(右記以外)	0 / 79,000 = 0%

そもそも新潟県の「新井」姓は全国平均の五分の一、隣接の群馬県の三十分の一と非常に少ない。長岡市は新潟県よりもさらに少ないが、片田及び片田に隣接する村松・濁沢を除くと旧古志郡では、七万九千人の住民に對

して、「新井」姓は皆無である。その反面、片田と隣接する村松、濁沢はわずか合計千二百人の住民に対して「新井」姓が三十名もいる。どうやら、もともとは、古志郡には全く新井姓はいなかったのである。

次の項で議論するように、長岡藩の中堅家臣団に新井姓が三系列認められ、縁者を含めれば五十名程度の新井姓がいたと想定される。そうであれば、片田、村松、濁沢に集中する新井姓もその家臣団の縁者であった可能性が非常に高くなる。

四 長岡藩士の新井二郎

それではいよいよ長岡藩における新井姓の検討に入ろう。

まず問題の発端となった長岡高等学校のルーツ「長岡洋学校」の教員であった新井二郎から調べる。それは新井二郎が数学の教師であったことと私の数学好きが共鳴したからである。いや、実を言えば、おそらく父・新井稔も数学好きだったのではなからうか。

父・稔が四才の時、祖父・新井孫七が亡くなっている。跡取りの長男・長平はまだ十三歳、家業が大変なことになったのは想像に難くない。父は高等小学校を卒業してすぐ村の大工に弟子入りしたという。その時、村の神社の曲線屋根材をまっすぐに切ってしまいえらく怒られたという話をしばしばしていた。

そんなことがあってか、東京で建築業として成功していた岩村家を頼って上京したらしい。

父にとつて幸せだったのは、大工仕事をしながら夜学で日本大学建築科が開設したコースに通わせてもらったことである。夜学とはいえ、当時の新鋭建築家の堀口捨巳などから教育を受けたと言い、ル・コルビジエやブルーノ・タウトのことも良く知っていた。

その父が使った数学の教科書が疎開先にあった。高等小学校出でいきなり専門学校レベルの教育を受けるのは厳しかったに違いない。ただ、その当時、似た環境にあった夜学生達のために、実に判りやすい参考書が使われていた。私は小学校五年生でありながら、ルビ入りの参考書を夢中になって読んだ。

その結果、鶴亀算などの連立方程式を行列式で解く方法を知った。行列式は今でも高校では教えない。また父の計算尺を使うと九九を覚えずに掛け算ができることも知った。だからいまでも六×九〓五十四は言えるが、逆の九×六〓五十四は覚束ない。

わたくしが数学好きになったのは、この父の参考書を熟読したお陰だと思う。なにしろ高等学校まで、数学に関して教師と対等の意識であった。そして父も数学好きだったと信じている。

余談が長くなってしまったが、私の頭の中では、数学を通じて新井二郎と新井家を勝手にむすびつけていたの

である。

まず長岡高等学校同窓会が創立一二五周年記念として作成した「会員名簿」の冒頭部分に明治五年(1872)の設立当初の教員として藤野善蔵・教頭、英学、窮理」と新井二郎(数学)を紹介している。それは長岡高校のルーツが長岡洋学校(創立者三島億二郎)であったことを宣言していることを意味する。

藤野善蔵は旧長岡藩士で維新後は慶應義塾で学び、福沢諭吉の信頼が厚く、塾頭格で英語教師を勤めていたが、小林虎三郎と共に大参事を務めていた校長の三島億二郎が高給で招聘したのだという。

その頃、長岡藩は北越戊辰戦争により焼け野原になり石高も七万四千石(実高約十四万石)から二万四千石に減らされ、士族は困窮を極めていた。その中で、明治三年(1870)支藩三根山藩から百俵の米が贈られて来たが、藩の大参事・小林虎三郎は、その米を藩士に分け与えず売却して学校設立の費用に宛てた。この故事は山本有三の戯曲「米百俵」で良く知られているが、その流れで設立されたのが明治四年の長岡洋学校なのである。洋学校とは英語と数学を教える学校の意味である。

藤野善蔵が文系責任者とすれば新井二郎は理系の責任者である。その消息を長岡市史に探し求めているが、有力な手がかりがない。

その中、慶応大学教授の内山正熊が発表した「日本海

軍の創設³⁾」という長文の論文の中に、たまたま新井二郎の名前をみつけた。日本海軍は創設当初、大藩からは五名、中藩からは四名のエリート人材の推薦を求めている。得られた候補者の中には東大の前身である大学南校の在学生の名もある。

新井二郎については、二十二歳(1849生)、長岡藩士族、大学南校郭内に居住、去ル卯年(1867)より測量学志し作己年(1869)九月に大学南校の「小得業生」となり余力で英学修行中とある。

北越戊辰戦争が始まったのは慶応四年(1868)五月であるからその前年に藩から派遣されたのであろう。リストには上がったが海軍には行かなかったらしい。

それではというので、今度は「長岡洋学校」の卒業者に注目してみた。それは前々稿「藤村と藤井宣正」を書く際に、明治の宗教哲学者、藤井宣正や井上円了が長岡洋学校で学んだことを知ったからである。

そして土屋隆夫の「井上圓了による長岡洋学校和同會の設立とその後の動向⁴⁾」という論文に出会った。土屋隆夫は長岡高校の教師である。

「和同會」とは明治九年、井上円了や梶野四男吉、小山谷郎、長尾平蔵ら八人が、福沢諭吉の三田演説会に学び「演説と討論」を目的として自主的に組織した会であるが、「輪講」形式による「作文」や「数学」の補習もあつ

たようである。当時、新井二郎の正規授業は毎日二時間、土曜一時間であったが、土曜の午後の「和同会」でも数学の補習が行われていた。

注目すべきことは、後に宗教哲学者として哲学館(現東洋大学)を創立することになる井上円了が意外といへばか数学の成績が非常に良かったこと、梅野四男吉は十勝の農業開発者でいわば理系、小山吉郎は海軍造船少将、そして、特に長尾平蔵は数学の成績が抜群で明治九年(1876)には学生の中から抜擢され数学の教員を嘱託され、以降同校に三十年間勤務するのである。

そのような状況から推測されるのは、数学教師としての新井二郎の影響である。年齢も近く、「和同会」設立にも何らかの役割を果たしていたかもしれない。

当然のことであるが長尾平蔵を学生の中から数学教員に推薦したのは新井二郎であろう。

長尾平蔵は同校の数学教師をその後三十年間務めながら、多くの「長岡藩史料」を収集しており、それらは「長岡藩政史(4)長尾平蔵収集長岡藩史料」(長岡市史双書)として出版されている。膨大な史料集をみると、細目が五百項もあり、数学者らしく、その多くが人員、数量、価格等を収録している。明治・大正の数学者の沢田吾一が退官後、史学を志し、名著『奈良朝時代民政経済の数的研究』を表したことに通じるものを感じる。

この史料集を詳細に読めば新井二郎の手懸かりを得る

と思ったが、残念ながら索引が付けられてなく、まだ成果に結びつかない。

五 長岡藩藩士分限帳

それではいよいよ長岡藩藩士分限帳で新井家の石高の推移を調べてみよう。幸いなことに資料は『長岡藩政史料集(6)長岡藩の家臣団』(長岡市史双書)に纏められている。その中から新井姓及び荒井姓を抜き出して一覧表にしたのが表3である。ただし冒頭の欄は分限帳ではなく、牧野氏が元和四年(1698)、短期間の越後長峰藩から長岡に移封された時に随行した一九四名の家臣名である。同じく末尾の「長岡藩士族」は「明治二年(1868)長岡藩士総名順」による。その結果、分限帳では全て新井姓なのに長岡移封時の随行家臣には、ひとりも新井姓が見当たらず、その替わりに荒井六兵衛の名があった。おそらく荒井は新井のことであろう。戦国期などでは漢字が同音であれば通じた例が多いからである。

「ついに見つけた!」という感慨があった。冒頭に記したように片田村の新井家屋号が『新橋屋六兵衛』で新井家の始祖・新井六兵衛に由来した可能性が高いからである。

しかし落ちていて検証して行こう。表3を見るとすぐ判るように新井姓には三系列あり、石高に変動があるが

代々襲名が続いている。その状況を要約して表4に示す。
彦左衛門系はいったん元禄分限帳で消えるが正徳分限帳で復活する。その一方で右衛門七系は宝永まで続くが正徳で消える。流れから見て、おそらくその時に右衛門

治二年(1656)死亡、二代目は幼少のため半知預かり百五十石になった上に名を右衛門七に戻す
新井彦九郎 七十石、新知三十石、百石
まず確認できたことは、新井右衛門七が彦左衛門の弟

表3 長岡藩分限帳に載る新井家の系列と禄高の推移

	石高	氏 名	職名等
長岡入城時 元和4年(1618)		荒井六兵衛	
寛永分限帳 1642年	300石 100石 100石	新井彦左衛門 新井右衛門七 新井彦九郎	
寛文分限帳 1661年	230石 13両3人	新井小市郎 新井又七	奏者、足軽頭 江戸
延宝分限帳 1679年	220石 150石 70石 7両	新井彦左衛門 新井右衛門七 新井彦九郎 新井又七	中間頭、着料武具預かり 江戸
元禄分限帳 1689年	150石 70石 50石	新井右衛門七 新井彦九郎 新井又七	武具預かり 御刀番
宝永分限帳 1707年	150石 70石	新井右衛門七 新井彦九郎	御召武具預かり 御普請奉行
正徳分限帳 1712年		新井彦左衛門 新井彦九郎 新井受本	
寛保分限帳 1741年	200石 150石	新井彦左衛門 新井彦九郎	御取次 足軽頭
延享分限帳 1746年	200石 150石	新井彦左衛門 新井彦十郎	御取次 足軽頭
中居屋敷禄高	200石 70石 ?	新井精八郎 新井弥吾 荒井尾右衛門	桶屋方
嘉永家中禄高 1850年	200石	新井彦左衛門	
安政分限帳 1860年	200石 80石	新井彦左衛門 新井正蔵	
長岡藩士族 1868年	90石 85石	新井鐘吾 新井小嶽	諸学校教授 器械司

七系が彦左衛門系を襲名したのであろう。
実はそれらの状況が蒼柴神社に伝わった宝暦四年(1754)の「諸士由緒記」に記されている。長文であるが要約する。

新井彦左衛門 初代三百石、元和四年長岡移封に随行、弟の右衛門七と左源太召出す。二代目彦左衛門は二百二十石、三代目は天和元年(1681)二百二十石、四代目は二百石

新井右衛門七 元和四年長岡移封随行、百石 正保年二百石、慶安五年(1652)三百石、幼名右衛門七から願い出て六兵衛に改名、万

表4 長岡藩新井家の系列整理結果

	長岡藩分限帳等 (年号/西暦年)												
新井家系列	寛永	慶安	寛文	延宝	元禄	宝永	正徳	寛保	延享	中居	嘉永	安政	明治
	1642	1652	1661	1679	1689	1707	1712	1741	1746		1850	1860	1868
彦左衛門系	300 石		230 石	220 石			(200) 石	200 石	200 石	200 石	200 石	200 石	85 石
	彦左		小市	彦左			彦左	彦左	彦左	精八	彦左	彦左	小嶽
右衛門七系	100 石	300 石			150 石	150 石							
	右衛	六兵			右衛	右衛							
彦九郎系	100 石			70 石	70 石	70 石	(150) 石	150 石	150 石				
	彦九			彦九	彦九	彦九	彦九	彦九	彦十				
又七系(?)			9両 2扶	7両	50 石					70 石		80 石	90 石
			又七	又七	又七					弥吾		正蔵	鐘吾

名前略称

彦左 新井彦左衛門
精八 新井精八郎右衛 新井右衛門七
彦九 新井彦九郎六兵 新井六兵衛
彦十 新井彦十郎

でありながら、二代目の彦左衛門が三百石から二百三十石に減石された頃、加増が続き三百石となって、幼名の右衛門七から六兵衛に改名することを願い出て認められていることである。それは荒井六兵衛の名跡を継いで新井家の宗家を称する行為であった。ここに荒井六兵衛が新井六兵衛であったことの証を得たと思う。

しかし折角六兵衛を名乗りながら間もなく亡くなると継嗣が若く、半知預かりとなり百五十石の相続、襲名も再び右衛門七に戻されてしまった。右衛門七系にとって是不本意であったに違いない。

この意思が表れたのは半知預かりが清算される宝永・寛保年頃である。その頃、理由は判らないが、既に彦左衛門系の襲名は途絶えていた。そこで右衛門七系が五十石増の二百石で彦左衛門を襲名、彦九郎系は当初の百石に五十石を加え、更には新井又七という江戸勤務であった人物が五十石を得て新たに登場している。「七」の名がついていることから右衛門七の系列に属する人物であろう。合わせた半知預かりの百五十石がこのように几帳面に清算され、これによって親族間の話合いが纏まったのであろう。

かくして新井三系列の「もめ事」は片付いた。右衛門系としては新井宗家を引き継ぐことができたが、「六兵衛」を名乗ることができず思いが残ったであろう。さて、残った問題は我が新井家の曾祖父・六蔵がどの

系統から婿入りしたかである。

それは時代と名前から容易に推測できる。安政分限帳に名のある新井正蔵であろう。正蔵と六蔵はそもそも名前が共通する。六蔵の婿入り時期を二十代前半の文久から慶応年代とすると正蔵の弟か息子なら年代的な齟齬はない。

かくして、新井家の祖は牧野氏が長岡に移封された時に随行した荒井六兵衛を初代として、その次男坊、幼名新井右衛門七(名を改め新井六兵衛)三百石を二代目とする右衛門七系列と判明した。それと共に、曾祖父・新井六蔵の実家は、八十石・新井正蔵と確定できたと考える。

更に付け加えるなら、祖父・新井孫七の祖父、すなわち六蔵の義父・孫六も新井六兵衛に連なる家系であった可能性が高いと考える。そもそも六蔵を婿に迎えたのも孫六が新井六兵衛に連なる家系であったからであり、その孫に孫七と名付けている。孫六とは新井六兵衛の「六代目の孫」を意識したもので、それ故に我が祖父に直系として孫七を名乗らせている。

正蔵の家系は遡上するとおそらく新井又七に繋がっており、新井家元祖の新井六兵衛に対する特別な関心と尊敬を維持していたに違いない。

なお、『ウィキペディア』「越後長岡藩の家臣団」によれば、「北越戦争で敗北後、(新井家は)百五十石に留ま

り異例の部類に属した」とある。よほど恭順派として功績があったのであろうか。

ところが表3に示したように「明治二年長岡藩士総名順」六百三十人のリストを見ると、諸学校教授并試補の欄に九十石・新井鎮吾、器械司兼弾薬運輸使の欄に八十五石・新井小嶽しか載っていない。しかも戊辰戦争の「戦死者のリスト」をみると新井家から次の三名が載っている。

新井嘉次太(銃士)、慶応四年(1868)五月十九日、長岡城下で戦死。

新井彦兵衛(銃兵)、慶応四年(1868)七月二十五日、長岡城下大工町で負傷、八月一日に見附病院で自刃。

新井兵蔵(銃卒)、慶応四年(1868)七月二十九日、長岡新町村で戦死。

銃兵は中上級士族、銃士は士族、銃卒は卒族に対応している。しかも新井家にあつては彦兵衛の名称は宗家の当主しか名乗れなかったはずである。すなわち二百石の新井宗家の当主は負傷自刃していた。明治二年のリストにないのは当然である。

『ウィキペディア』の記述に誤りが多いことは前々稿で述べたが、このケースも誤りと断定してもよいであろう。

新井家の戦死者でもうひとり注目すべきなのは、銃卒の新井兵蔵である。名前の類似性から新井正蔵の子息だったのではなからうか。そうであれば曾祖父・六蔵の兄弟であつたかも知れない。

新井兵蔵が戦死したのは、長岡城が二度目の落城をした日である。同日、各地で追撃戦がおこなわれたが、その中でも片田村・十日町の戦闘は激しく、藩校・崇徳館教授の酒井貞蔵や用人で銃士隊長の花輪彦左衛門をはじめとして、銃士級では鳥山岩之丞、仙田隼人、大野治助、稲葉弥太郎、和田忠九郎、従卒では福島織之丞の八名が戦死している。

これらの戦死者数は、五月十九日の新政府側による長岡城落城(39名)、七月二十五日の長岡城奮回(36名)、七月二十九日の再落城(15名)を除けば、六月二十二日の福島村の戦闘の十名に次いで多い。しかも越後地域における最終戦であつた。

おそらく片田村の曾祖父・新井六蔵はその戦いを現地で見たに違いない。

さて、それでは新井二郎はどの系列に繋がるのであろうか。おそらく新井正蔵、新井鎮吾の系列につながると思われる。理由は戊辰戦争に敗れた後、明治二年の藩士リストに新井鎮吾を諸学校教授としているからである。

新井弥吾、正蔵、鎮吾と繋がる家系は諸学校教授の家系であり新井二郎の出身家であつた可能性が高い。

やつと曾祖父・六蔵と新井二郎の関係が繋がった。近ければ兄弟、離れていても三・四親等くらいか。ここまですでに推測すると踏み込みすぎるかも知れないが、新井二郎の存在が私を導いてくれたことに免じて許されるかとおもう。

現在、旧長岡市内に住む新井姓は五十名ほどである。戸数にすれば十五戸くらいに過ぎない。丁寧に訊ねれば新井二郎の子孫にヒットするであろう。後日を期したい。

註記

(1) 『苗字由来ネット』 <https://myoji-yurai.net>。

(2) 岡南の郷土誌編集委員会『岡南の郷土誌』岡南中学校後援会、一九八五、三二〇～三三四頁。

(3) 「穂苅」と言う姓には思い出がある。高校三年生の夏休み、梅酒を飲みながら、出版されたばかりの分厚い「数学問題集」を最初から全部解いていた。そして模範解答に数件誤りを見つけ、そのことを著者の都立大学教授・穂苅四三二先生にお知らせしたところ、実に丁寧なお手紙を頂戴し、数学に関してはどの大学でも大丈夫と褒めていただいた。どうせ模範解答例など学生に作らせたに違いないが、とても嬉しかった。穂苅先生は後に城西大学の学長を務めている。今度のルーツ探索で母

の郷里、高山村の偉人・穂苅茂左衛門のことを知り、ついでに「穂苅」姓の分布を調べたところ新潟県が第一位でその中でも高山村は最も密度が高い所、穂苅先生のルーツは三島郡来迎寺、高山村から信濃川を挟んで三キロメートルのところにあった。

(4) 南興水産株式会社については、川上善九郎『南興水産の足跡』南水会、一九九四がある。

(5) 内山正熊「日本海軍の創設」『法学研究』五三卷一、一八〇、一七五頁。

(6) 土屋隆夫「井上圓了による長岡洋學校和同會の設立とその後の動向」『井上円了センター年報』二一、二〇二、二二、二四九頁。

(7) 「長尾平藏収集長岡藩史料」『長岡藩政史料集(4)』長岡市史双書23、一九九二。

(8) 「長岡藩の家臣団」『長岡藩政史料集(6)』長岡市史双書41、二〇〇二、一七、一七六頁。

(9) 「明治二年長岡藩士総名順」『長岡藩政史料集(4)』長岡市史双書23、一九九二、二三八、二四五頁。

(10) 「諸士由緒記」『長岡藩政史料集(2) 家中編』長岡市史双書15、一九九一、一四二頁。藩士五八九家の由緒をまとめたもので、原本は一七五四年成立の蒼柴神社所蔵。

(11) 招魂社(蒼紫神社の奥)の碑、明治七(1874)年、戊辰の役で亡くなった長岡藩士たち三百五十余名を慰

霊すべく、歴代藩主靈廟の隣りに創建された。リストが <http://www.aizue.net/keiyuti/niigataphoto/jyunnan-syokonsya.html> に掲載されている。